

鮎の宿

森岡 正作

郭公のひと声朝の鯨を振る
女将より父のこと聞く鮎の宿
雨蛙鳴かせて夕の風呂長し
椎匂ふ己に腹の立つばかり
青葉木菟父の形見に歎異抄
戦争を語らず逝けり夾竹桃
青岬暮れて漁火数珠つなぎ

泳ぎつつ

登四郎先生に「泳ぎつつふと溺れたし鱈雲」という句がある。研三主宰に伺ったことはないが、先生のお姿、雰囲気にはスポーツマンというイメージは浮かんで来ない。それでも、先生に泳ぎの句が多いことからすれば、泳ぎが得意だったのではなからうか。海を泳いでいて、「溺れたし」とは言うものの、心地良さそうな余裕が感じられる。

さて私はというと、よく川の話をするので、泳ぎも上手いだろうと思われがちであるが駄目である。遊びは対岸へ泳ぎ渡ることで、犬掻きでも何でも着けば良かった。鮎を獲るため潜ってばかりいたので、二十五メートルプールなら潜ったままでも行けるのであるが、普通の泳ぎでは誰でも出来る、顔を上げての息継ぎが出来ないのである。スキーもそれとおりで、雪国の移動手段であって、ただ滑りさえすれば良いのである。何でも「出来る」とは答えるが、決して上手くはない。山の斜面を滑降しても不恰好で様にならないのだ。